

留学を終えて

聖マリア女学院高等学校 平田 紫音
(オーストラリア)

オーストラリアでの1年間の留学から帰国し、はや2ヶ月が経とうとしています。昨年7月、アデレード空港に一人で降り立ってから、あっという間の1年でした。

私の留学はオーストラリアに向かうフライトの中での素敵な出会いから始まりました。ケアンズからアデレードまでのオーストラリア国内線の飛行機で、隣同士になったのは、アデレードに住む中学生のオーストラリア人の女の子でした。彼女は私が日本からの留学生だと知ると、片言の日本語を使いながら、私に一生懸命話しかけてくれました。中学校で日本語を勉強しているという彼女は、私の最初のオージーの友人となりました。また、アデレード空港では、朝の渋滞に巻き込まれ、ホストファザーの到着が遅れていたため、私は一人、大きなスーツケースを持って、立ち尽くしていました。すると、空港職員の方がにこやかに近づいてきました。私は思い切って、つたない英語でホストファミリーが待ち合わせにいないと困っていることを伝えると、空港職員の方がホストファザーに電話をしてくれ、間もなく到着するから心配しなくて良いと言ってくれました。彼はホストファザーが到着するまで付き添い、ホストファザーとの出会いを祝福してくれました。こんなふうに私の留学は、最初からフランクで明るく、優しいオージーとの出会いから始まりました。

私のホストファミリーは、イタリア系のオーストラリア人のご夫婦とおばあちゃんの三人家族でしたが、週に一度は子供たちや孫、親戚が集まってくる賑やかな家族でした。私は本当の家族の一員のように温かく接してもらいました。後から聞いたのですが、ホストマザーは最初、私が英語を聞き取ることができず、何度も聞き返し、身振り手振りでコミュニケーションを取っていたため、やっていけるだろうかと心配していたそうです。私はできるだけリビングで過ごすようにし、毎日学校であった出来事を報告しました。また、ホストファミリーの親戚の家にはブラジル、スイス、中国からの留学生たちがホームステイしていたので、週に1回のファミリーナイトと呼ばれる夕食会を通して、私は様々な国の人々と交流ができ、たくさんの友達ができたことも私の宝物になりました。人と人とのつながりを大切にするホストファミリーから、私は改めて家族のきずなの大切さを学びました。

つぎに、私が通っていたヘンリー・ハイスクールについても紹介したいと思います。ヘンリー・ハイスクールは美しいヘンリービーチのすぐそばにあります。ホストファミリーの家からはバスを乗り継いでおよそ40分とやや遠いのですが、そのおかげで1か月後にはアデレード市内中、バスでどこへでも出かけることができるようになりました。また、ヘンリー・ハイスクールでは、たくさんの留学生が学んでいて、ISECという留学生のためのサポートクラスが用意されていました。オーストラリアの文化を理解するための授業や、アデレードの街の歴史を学ぶ課外授業、困ったときの学生相談などもあり、様々なサポートを受けることができました。ヘンリー・ハイスクールと

日本の高校との大きな違いは、教科書はすべてオンライン上にあり、高校から貸し出されたパソコンを使ってレポートを提出したり、先生に質問したりすることです。オーストラリアの高校は、自分で受けたい授業を選択していくのですが、留学当初のまだまだ英語がよく理解できない時期に科目を選択しなければならなかったため、シラバスを読んで授業内容を理解し、科目を決定するのに時間がかかりました。

私が最も印象に残っている授業はミュージカルと数学の授業です。ミュージカルを選択した高1、高2の約90名で、半年間の準備期間を経て『Bugsy Malone(ダウタウン物語)』というミュージカルを上演しました。たくさんの生徒たちと一緒に衣装や大道具、小道具を作り、公演を成功させたことは本当に良い思い出です。一方、数学の授業では、日本の数学との違いに戸惑いました。日本では、例えば関数の勉強だと、関数の解き方を学び、正しく計算することが求められます。しかし、オーストラリアでは、関数の計算は関数電卓を使い、計算できることよりも、その関数を使って何がわかるのかということに重きが置かれています。三角関数を使って、乳牛の生乳の生産量について説明せよというレポートが出されたときは、何を使って、どう説明したらよいかかわからず、三角関数について英語で理解するのに、本当に苦労しました。

オーストラリアでの留学を通して、私はこれまで経験してきた日本の文化とは違う、新しい文化や考え方にたくさん触れることができたと思います。積極的にコミュニケーションを取り、自分の考えを伝えていくことで、相手も私をより理解しようとしてくれるのだということを私は体験しました。日本では、周囲に気を遣い、求められなければ「私はこう思う。」と自分の意見を言わなかった私でしたが、オーストラリアでは言葉の壁があったからこそ、自分から積極的に自分の意見を伝えようと努力できたように思います。また、私は日本人としての気遣いの心も忘れないように努めました。朝、ホストファミリーよりも先に起きて出かけるときには、メッセージをテーブルの上に残し、感謝の心を必ず伝えるようにしました。日本人の思いやりの心は、オーストラリアでも、日本人の素晴らしいところだとして評価されており、「その背景にある日本の文化を学びたいので、ぜひ日本に留学したい。」と言ってくれる友達が何人もいてくれたことを私は誇りに思います。そして、この留学を実現するために支えてくれた家族や学校の先生、留学期間中に会ったホストファミリーや多くの友達に感謝の気持ちでいっぱいです。私は将来、この留学経験を生かして、もっともっとたくさんの国の人々と交流し、相手の国の文化や価値観を知り、日本の良さを伝えていけるようにしていきたいと思っています。

